

ボタニカル・スケッチでたどる花葉会海外ツアー

鳥居恒夫

花葉会海外園芸事情調査ツアーに参加できるようになったのは、退職後の2001年秋の西オーストラリアからです。団長の鈴木司さんや先達格の田中桃三さんは当然ながら、同級生の菊地才知子さんが初期からの参加者で、彼女から情報は聞いていましたが、現役時には1週間もの休みは取れませんでした。今年のスペイン・ビレナーの旅で12回目、後期高齢者ともなると古顔になりましたが、病院通いも始まり、何時が最後の機会となるかと考え、この有意義な花の旅の思い出を残させていただくことにしました。

あらゆる植物と植物に関わる文化がおもしろい

植物園で仕事をしてきた私には、野生植物と園芸植物という区別はありません。経済的な評価のない植物にも、どこかに興味を感じるところを見出したいと考えます。

植物とそれに関わる文化を探りたいというのが、私の花の旅の目的なのです。自分の目で見、触れてくれば、どの本にも書かれていない、聞いたこともない事実を、毎回一つや二つ知ることができます。

ボタニカル・スケッチ

1999年からはじめた植物のスケッチは、ボタニカル・スケッチと名づけ、今年の夏には4700点になりました。他人に見ていただくものではなく、自身のためのメモのようなまづい図ですが、私にとっては実物をよく見て描こうとした大切なもので、植物を知ることだけでなく、その数が増えてゆく楽しさもあります。

花葉会の花の旅は新たな植物に出会う絶好の機会です、寸暇を惜しんで描きました。時間の許す限りで葉っぱ一枚・花一輪でも描くものですが、この旅では立ち止まって描くわけにはゆきません。高山など保護地域ではできませんが、道端に生える草や枝を取ってポリ袋に入れて持ち、宿についてからスケッチにかかります。

数が多いと夜遅くまでかかり、そんな時には同室の方にご迷惑をかけたこともありました。ホテルの部屋は明かりが暗く、肝心な部分がよく見えません。一番明るいのはバスルームで、よくそこへ入って描きました。3年ほど前から右目に黄斑変性症が発症して、ゆがんで見えるようになり、無理ができなくなってきました。

これまでの旅の中から、幾つかの拙いスケッチを見させていただくことにしました。

サンジミアーノのケーパー

2007年6月のイタリアの旅の一日、フィレンツェから2時間ほどの、サンジミアーノに行きました。トスカーナ地方の丘陵地にある中世からの城壁の街で、塔が沢山建てられたことで知られています。小高い建物から望観すると、牧場の草地とブドウにオリーブ畑で、典型的なトスカーナ地方の景観です。のどかながら緑が白っぽい感じで、これが地中海性気候の風土なのかと気づきました。冬から春にかけては雨が降るものの、夏には乾期になってしまうこの地方、オリーブが茂り、ブドウがたわわに熟すといっても、はたして豊穡な風土なのかという疑問がわきます。荒地に深く根を下すオリーブやブドウだからこそ、この土地で育つことができると考えるのが正解ではないかと感じました。そこで思い起こしたのは日本の艶やかな緑の豊かさで、一年を通して充分すぎるほど降る雨の恩恵に違いありません。

石畳を踏んで街の散策を終え、石門を出るとすでに集合時間も迫っており、仲間が集まってきました。ふっと背後の城壁を仰ぎ見ると、石の継ぎ目に根を張った緑のブッシュが目に入ります。何とそれはケーパーの株で、枝を分けて1mほどに茂り、薄白い4弁の盃形の花を着け、睫毛のような紫色の蕊が広がっています。ケーパーを見るのは初めてでしたが、一見してそれとわかったのは、長い間植物に関わってきたおかげで、こんなところに育つことを知って感激しました。私がケーパーだケーパーだと騒いだので、他の人も石垣を

見上げて、ケーパーって何？ という。ケーパー知らないの、お昼のスパゲッティに乗っていたじゃないか。日本でもイタリア料理などに添えられ、蕾を酢漬けにした瓶詰が売られています。ハーブ類に詳しい嶋村宣幸さんはさすがにご存知でしたが、見るのは初めてという方ばかりであったようでした。

中世の継ぎ目を残す石壁に
夕陽陰さしケーパーの花取らう

恒細

白い一日花が夕方近くになって少し赤みを差してきたのを感じ、口をついて出た一首です。

翌日に訪れたピサでも、有名な斜塔を望む背後の石壁の継ぎ目に根を張っていましたが、皆さんは斜塔の方に神経を集中されていたので、気づいたのは私だけでした。

テレビで地中海の海辺の景色が紹介される時には、岩壁にケーパーらしきブッシュがくっついているのを見ることがあります。どうしてこんな物を食べるのかと考えてみましたが、乾燥する厳しい風土で、食べられるものは何でも利用した古代からの習慣ではないでしょうか。そういう意味では、やはりハーブの一つなのでしょう。



イタリア サンジミアーノ 2007. 7. 1

ケーパー
Capparis spinosa フウチョウソウ科
イタリア サンジミアーノ 2007. 7. 1

ボタニカル・スケッチによる旅の記録

①サザン・クロス

Xanthosia rotundifolia セリ科

南西オーストラリア Bluff Knke山 2001. 9. 1

高原の頂近く、通路の舗装面を持ち上げるように育っていたが、採取はできないのでその場にしゃがんで描いた。雨が降り出し出発時間がきて泣く泣く中断した初期の記念すべき1点。四分岐した花序に真っ白な苞がまさしく十字星で、魅惑的な植物。日本ではクロウエア (*Crowea*) が、サザン・クロスとして売られている。

②カエデゴウシュウアオギリ (ツボノキ)

Brachychiton rupestris アオギリ科

南西オーストラリアの街路 2001. 10. 9

田舎の駅の傍らで休憩になった時、果実のついた枝を採取。名前がわからなかったが、果実がピンポンノキ (*Sterculia nobilis*) に似ていることに気がつき、この種に到達した。

③小形のミミカキグサ

Utricularia multifida タヌキモ科

南西オーストラリア ルーイン岬への途中道路
2001. 10. 11

4 cmほどで、砂利道の轍の水溜りに大繁殖しているのを見つけて驚嘆した。これでも食虫植物で、専門家の田中さんの満悦顔が思い出される。

④Yellow Rattle

Rhinanthus minor ゴマノハグサ科

オーストリア ゼーフェルト 2002. 7. 2

オランダからドイツを巡った途中、オーストリアの山岳ホテルに宿泊。スキー場の草原には、欧州の草原の草花が花盛りで、深夜まで夢中で描いた中の一点。シオガマギクに近い半寄生植物で、黄色い花が咲き、今年のピレネーの山でも見かけた。

⑤コーファイ / Kowhai (現地名)

Sophora microphylla マメ科

ニュージーランド北島 ニュープリマスのホテル
2003. 10. 30

落葉性の中木で、芽出しとともに黄色の豆花が咲き、原野にも見られ、国花である。

⑥ミオソティディウム

Myosotidium hortensia ムラサキ科
ニュージーランド北島 エグモント山麓の庭園
2003. 10. 31

ワスレナグサに近い多年草で、オオバコのように大きな葉が艶やかで、青紫色の花とよく調和し、育ててみたくなる。ニュージーランド原産で、庭で培養されている。昼食の休憩時間に描ききれなかったが、貴重な一点。

⑦ハンドフラワーツリー

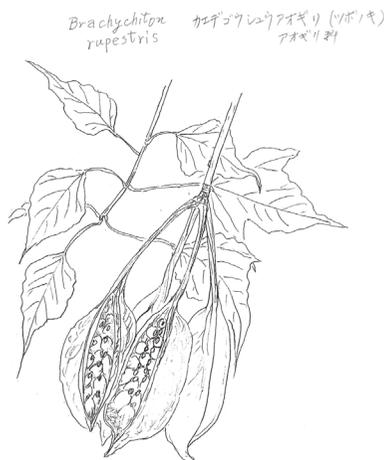
Chiranthodendron platanoides アオギリ科
ニュージーランド北島 オークランドの公園
2003. 11. 3

公園にあった5mあまりの樹木で、太目の枝が垂れて真っ赤な花が咲いていた。花の形も大きさもユリノキに似ていたが、思い当たる植物がない。2年ほど経って、ある本にそれらしい植物を見つけ、やっとその名前が判明。わからなくても、よく観察して図を描いておけば、いつかわかる時がくる。メキシコ産で、メキシコ人には大切な樹木だという。



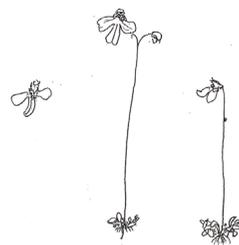
Xanthosia rotundifolia
⑧ Southern Cross セリ科
西オーストラリア 高奈 2001. 10. 9

①サザン・クロス
Xanthosia rotundifolia セリ科
南西オーストラリア Bluff Knke山
2001. 9. 1



Brachychiton rupestris カエデゴウシュウアオギリ (ツボノキ) アオギリ科

②カエデゴウシュウアオギリ (ツボノキ)
Brachychiton rupestris
アオギリ科
南西オーストラリアの街路
2001. 10. 9



Utricularia multifida タヌキモ科
小形のミミカゲ草の仲間
道路のわき道の水溜りで大量産していた
西オーストラリア 2001. 10. 11

③小形のミミカゲ草
Utricularia multifida タヌキモ科
南西オーストラリア ルーイン岬
への途中道路 2001. 10. 11

⑧ネットウル

Urtica dioica イラクサ科
英国 エディンバラ市街路傍 2004. 6. 29

郊外のホテルに泊り、夕方のまだ明るいうちに周辺を散策していると、スケッチの材料となる植物がいくらかでもある。イラクサの仲間のネットウルは、刺だらけの痛い野草で扱いにくいですが、この機会に描いておきたかった。かつてこの皮から繊維をとり、シャツなどの布を織っていた民族の歴史を秘めた植物だからである。

⑨ディギタリスの一種

Digitalis lanata ゴマノハグサ科
クロナネソウの一種
Nigella arvensis キンポウゲ科
ブルガリア 街道のドライブイン脇の原野
2012. 6. 30

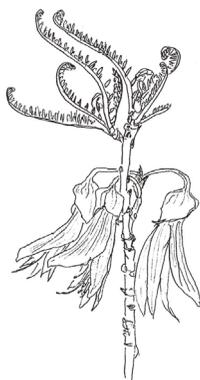
ブルガリアには、園芸植物の原種のような野草が咲き乱れる草場がどこにもあり、休憩でバスが停まると、お仲間は写真を取りまくって、出発の笛が鳴っても誰も帰ってこない。

学名の2綴り目、種小名の *lanata* 及び *arvensis* の文字は、同行して下さったブルガリア・アカデミー・植物園のペトロヴァ先生のもの。スケッチを差し出したら、心よくつぎつぎと同定していただくことができた。



Rhinanthus minor ④ Yellow Rattle
オーストリア ゼーフェルト 2002. 7. 2
ゴマノハグサ科

④ Yellow Rattle
Rhinanthus minor ゴマノハグサ科
オーストリア ゼーフェルト
2002. 7. 2



Sophora microphylla
現地名 コーワイ ニュージーランドの国花 2002/300
Kowhai
2003. 10. 30

⑤ コーワイ / Kowhai (現地名)
Sophora microphylla マメ科
ニュージーランド北島
ニュープリマスのホテル 2003. 10. 30



Myosotidium hortensia ミオソティディウム
ムラサキ科
ニュージーランド 2003. 10. 31

⑥ ミオソティディウム
Myosotidium hortensia ムラサキ科
ニュージーランド北島 エグモント山麓
の庭園 2003. 10. 31



⑦ ハンドフラワーツリー
Chiranthodendron platanioides
アオギリ科
ニュージーランド北島
オークランドの公園 2003. 11. 3



Urtica dioica ⑧ ネットル
英国エディンバラ 2004. 6. 29
ウラボシ科

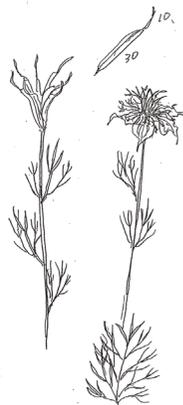
⑧ ネットウル
Urtica dioica イラクサ科
英国 エディンバラ市街路傍
2004. 6. 29

Digitalis lanata



ゴマノハグサ科
ブルガリアの街道脇の草地 2012. 6. 30

Nigella arvensis



キンボウゲ科
2012. 6. 30

⑨ デイギタリスの一種
Digitalis lanata ゴマノハグサ科
クロタネソウの一種
Nigella arvensis キンボウゲ科
ブルガリア 街道のドライブリン脇の
原野 2012. 6. 30